

6 日目(12 月 11 日) — 国会にて

日本の国会には脱原発委員がいるようになった。彼らは「原発ゼロの会」という超党派で組織されたグループだ。すべての党の議員が参加している。安倍首相の政権政党であり、最近原発は日本のエネルギー供給に不可欠だと強調した自民党の議員も入っている。日本が原発抜きのエネルギー・シナリオを理由に温室効果ガスの削減目標値を大幅に引き下げたことは、ワルシャワで怒りを買ったが、それは原発の再稼働への国際的な支援を受けるという安倍首相の戦略の一部である。2 週間ほど前にドイツのエネルギー転換を視察に来たこの議員グループとベルリンで話し合う機会があったが、今回はその対話を続けることができた。彼らは非常に熱心だが、国会の中で約 10%に当たる 63 人の議員では無力感を感じている。ドイツの脱原発の推進者である緑の党は連邦議会ではいつも 10%に満たなかったが、それでも目的を達したと私が言うと、彼らは笑った。勇気づけると彼らの気持ちが良くなった。原発に批判的な議員たちにとって、ドイツの緑の党は大きな模範だ。議員たちはこの超党派の特別な協力によって、リスクを冒している。彼らのうちの何人かは重要な役職、政府の役職に就いていた、あるいは現在も就いている。日本ではメインストリームに抗すると、すぐに排除されるのだ。

私は黒川氏の国会事故調査委員会の最終報告書について、議会で審議がなされたかを質問したところ、私が思っていたとおり審議はなかったという答えだった。「原発ゼロの会」が非常に不安に思っている福島第一の状況についても話した。汚染水の除染技術はまだ試験段階である。4 号炉の冷却プールからの燃料棒取出しがうまくいくかどうか、不確かである。安倍首相でさえ状況が安定するには 40 年かかると言っている。非常に影響力のある自民党議員で、ゼロの会の共同代表である河野氏は政府に対して、原発の再稼働あるいは外国への核技術の輸出を進めるのではなく、大惨事の克服に集中するように要求している。議員でもあり医師でもある阿部(名前だけは首相と同じアベだ)知子氏は、福島第一での作業員の放射線防護と健康監視について、激しく批判する。彼女が非難しているのは、政府は何もコントロールせず、すべては東電に任せ切っていることだ。すべての原発労働者の線量記録が集められている書類は、原発事業者に属する研究所によって管理されているという。不透明さ、すべてのシステムにおけるコントロールの欠如といった欠陥に対するすべての必要な改革について、黒川氏の報告書は具体的に書いているのだが、国会は残念ながら報告書と取り組んでいない。

「原発ゼロの会」との話し合いの後、一人で戦っている山本太郎氏と会った。かつてはテレビ俳優をしていたが、脱原発を声高に要求し始めた途端、出演の話がなくなった(原子カムラ!)。そして 7 月の参議院選挙で当選した。さらに彼は、政治を越えて存在し、政治から離れた存在であるべき天皇に、福島第一で起こりうる危険について記した文書を園遊会で手渡すという日本では許されざるタブーを破ってしまったのだ。彼を議会から追放するという要求は実現されなかった。しかし、今後このような園遊会には参加を禁じられることになった。私はインタビューの合間に彼に会った。チェックのシャツ、素足にサンダルというラフな恰好である。厳しいドレスコードのある国会での彼のいでたちは異様だ。そして態度も大いに変わっている。情熱的、大きな声、丁寧な挨拶なしにいきなり主題に入ってくる。彼が不都合な存在で、拒絶に会うのも不思議ではない。他方、卑下が礼儀正しさになってしまった日本社会を政治的惰眠から呼び覚ますには、彼のような反乱者が必要である。船橋教授、黒川氏、そしてまた山本氏のような人物だ。丁寧な挨拶は抜きにしたにもかかわらず、私たちの話し合いは予定を大幅に越えた。話題は脱原発、放射線防護から、ちょうど議決されたばかりの特定秘密保護法の言論の自由や民主主義の原則への攻撃、ドイツと日本における選挙制度にまで及んだ。彼が驚いたのは、会派に属さないドイツの連邦議員がどのよう

な権利を持っているかを知ったときであった。国会で、彼は質疑応答の権利を持っていない、つまり国会で政治活動ができないのである。だから彼は知名度を利用して、国会外で原発政策に関連することを広めている。「原発ゼロの会」と同じように、彼も再びドイツを訪れ、脱原発とエネルギー転換のお手本の国がどうやっているかを見たいと思っている。

ドイツの例がいかに重要で、成功しなければならないかは、日本に来ると目と耳に飛び込んでくる。ドイツの脱原発とエネルギー転換で問題になるのは、電気料金にとどまらない。